

妙法蓮華經。化城諭品。第七

佛、諸の比丘に告げたまわく、

乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾の時に佛いましき。大通智勝如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名く。其の國を好成と名け、劫を大相と名く。諸の比丘、彼の佛の滅度より已來、甚だ大に久遠なり。

譬えば三千大千世界の所有の地種を、假使人あつて磨り以て墨と爲し、東方千の國土を過ぎて乃ち一點を下さん、大さ微塵の如し。又千の國土を過ぎて復一點を下さん。是の如く展轉して地種の墨を盡くさんが如き、汝等が意に於て云何。是の諸の國土を、若しは算師若しは算師の弟子、能く邊際を得て其の數を知らんや不や。不なり、世尊。諸の比丘、是の人の經る所の國土の、若しは點ぜると點ぜざるとを、盡く抹して塵となして、一塵を一劫とせん。彼の佛の滅度より已來、復是の數に過ぎたること無量無邊百千萬億阿僧祇劫なり。我如來の知見力を以ての故に、彼の久遠を觀ること猶お今日の如し。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく

我過去世の 無量無邊劫を念うに

佛兩足尊いましき 大通智勝と名く

人あつて力を以て 三千大千の土を磨つて

此の諸の地種を盡くして 皆悉く以て墨となし

千の國土を過ぎて 乃ち一の塵點を下さん

是の如く展轉し點じて 此の諸の塵墨を盡くさんが如し

是の如き諸の國土の 點ぜると點ぜざると等を

復盡く抹して塵となし 一塵を一劫とせん

此の諸の微塵の數に 其の劫復是れに過ぎたり

彼の佛の滅度より來 是の如く無量劫なり

如來の無礙智 彼の佛の滅度

及び聲聞・菩薩を知ること 今の滅度を見るが如し

諸の比丘當に知るべし 佛智は淨くして微妙に

無漏無所礙にして 無量劫を通達す

佛、諸の比丘に告げたまわく、

大通智勝佛は壽五百四十萬億那由他劫なり、其の佛本道場に

坐して、魔軍を破し已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得たもうに

垂んとするに、而も諸佛の法現在前せず。是の如く一小劫乃至

十小劫、結跏趺坐して身心動じたまわず。而も諸佛の法猶お

在前せざりき。爾の時に切利の諸天、先より彼の佛の爲に

菩提樹下に於て師子座を敷けり、高さ一由旬。佛此の座に於て

當に阿耨多羅三藐三菩提を得たもうべしと。適めて此の座に坐

したもう。時に諸の梵天王、衆の天華を雨らすこと、面ご

とに百由旬なり。香風時に來つて萎める華を吹き去つて、更に

新しき者を雨らす。是の如く絶えず十小劫を満てて佛を供養

す。乃至滅度まで常に此の華を雨らしき。四王の諸天、佛を

供養せんが爲に常に天鼓を撃つ。其餘の諸天、天の伎樂を作す

こと十小劫を満つ。滅度に至るまで亦復是の如し。諸の

比丘、大通智勝佛十小劫を過ぎて諸佛の法乃し現在前して、

阿耨多羅三藐三菩提を成じたまいき。

其の佛未だ出家したまわざりし時に十六の子あり。其の第一

をば名を智積という。諸子各種種の珍異玩好の具あり。父

阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たもうを聞いて、皆所珍

を捨てて佛所に往詣す。諸母涕泣して隨つて之を送る。其の祖

轉輪聖王、一百の大臣及び餘の百千萬億の人民と、皆共に圍繞  
 し隨つて道場に至る。咸く大通智勝如來に親近して、供養・  
 恭敬・尊重・讚歎したてまつらんと欲し、到り已つて頭面に足  
 を禮し、佛を繞り畢已つて一心に合掌し、世尊を瞻仰して偈を  
 以て頌して曰さく、

大威徳世尊 衆生を度せんが爲の故に

無量億歳に於て 爾して乃し成佛することを得

諸願已に具足したまえり 善哉吉無上

世尊は甚だ希有なり 一び坐して十小劫

身體及び手足 靜然として安じて動せず

其の心常に愴泊にして 未だ曾て散亂あらず

究竟して永く寂滅し 無漏の法に安住したまえり

今者世尊の 安穩に佛道を成じたもうを見て

我等善利を得 稱慶して大に歡喜す

衆生は常に苦惱し 盲冥にして導師なし

苦盡の道を識らず 解脱を求むることを知らずして

長夜に惡趣を増し 諸天衆を滅損す

冥きより冥きに入り 永く佛の名を聞かず

今佛最上 安穩無漏の法を得たまえり

我等及び天・人 これ最大利を得たり

是の故に 咸く稽首して 無上尊を歸命したてまつる

爾の時に十六王子、偈をもって佛を讚め已つて、世尊に法輪  
 を轉じたまえと勸請し、咸く是の言を作さく、

世尊、法を説きたまえ、安穩ならしむる所多からん。天・人

を憐愍し饒益したまえ。

重ねて偈を説いて言さく

世雄は等倫なし 百福をもって自ら莊嚴し

無上の智慧を得たまえり 願わくは世間の爲に説いて

我等及び諸の衆生の類を度脱し

爲に分別し顯示して 是の智慧を得せしめたまえ

若し我等佛を得ば 衆生亦復然ならん

世尊は衆生 深心の所念を知り

亦所行の道を知り 又智慧力を知しめせり

欲樂及び修福 宿命所行の業

世尊悉く知しめし已れり 當に無上輪を轉じたもうべし

佛、諸の比丘に告げたまわく、

大通智勝佛阿耨多羅三藐三菩提を得たまひし時、十方各五

百萬億の諸佛世界六種に震動し、其の國の中間幽冥の處、

日月の威光も照すこと能わざる所、而も皆大に明かなり。其

の中の衆生 各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、

此の中に云何ぞ忽ちに衆生を生ぜる。

又其の國界の諸天の宮殿乃至梵宮まで六種に震動し、大光普

く照して世界に徧滿し、諸天の光に勝れり。爾の時に東方五百

萬億の諸の國土の中の梵天の宮殿、光明照曜して常の明に

倍れり。諸の梵天王 各是の念を作さく、

今者宮殿の光明昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以

て此の相を現ずる。

是の時に諸の梵天王即ち各相詣つて共に此の事を議す。

而も彼の衆の中に一りの大梵天王あり、救一切と名く。諸の

梵衆の爲に偈を説いて言わく、

我等が諸の宮殿 光明昔より未だ有らず

此れは是れ何の因縁ぞ 宜しく各共に之を求むべし

大徳の天の生ぜるとやせん

佛の世間に出でたまえるとやせん

而も此の大光明 徧く十方を照す

爾の時に五百萬億の國土の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣械を以て諸の天華を盛つて、共に西方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し師子座に坐して、諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の恭敬圍繞せるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請ずるを見る。即時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し繞ること百千帀して、即ち天華を以て佛の上に散ず、其の所散の華須彌山の如し。並に以て佛の菩提樹に供養す。其の菩提樹高さ十由旬なり。華の供養已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して、是の言を作さく、

唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿願わくは納處を垂れたまえ。

時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

世尊は甚だ希有にして 値遇すること得べきこと難し  
無量の功德を具して 能く一切を救護し

天・人の大師として 世間を哀愍したもう  
十方の諸の衆生 普く皆饒益を蒙る

我等が従り來る所は 五百萬億の國なり  
深禪定の樂を捨てたることは

佛を供養せんが爲の故なり  
我等先世の福あつて 宮殿甚だ嚴飾せり

今以て世尊に奉る 唯願わくは哀んで納受したまえ  
爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已つて、各

是の言を作さく、

唯願わくは世尊、法輪を轉じて衆生を度脱し、涅槃の道を

開きたまえ。

時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を説いて言さく、

世雄兩足尊 唯願わくは法を演説し

大慈悲の力を以て 苦惱の衆生を度したまえ

爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したもう。又

諸の比丘、東南方五百萬億の國土の諸の大梵王、各自

ら宮殿の光明照耀して昔より未だ有らざる所なるをもつ

て、歡喜踊躍し希有の心を生じて、即ち各相詣つて共に

此の事を議す。時に彼の衆の中に一りの大梵天王あり、名を

大悲という。諸の梵衆の爲に偈を説いて言わく、

是の事何の因縁あつて 此の如き相を現ずる

我等が諸の宮殿 光明昔より未だ有らず

大徳の天の生ぜるとやせん

佛の世間に出でたまえるとやせん

未だ會て此の相を見ず 當に共に一心に求むべし

千萬億の土を過ぐとも 光を尋ねて共に之を推せん

多くは是れ佛の世に出でて

苦の衆生を度脱したもうならん

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣械を

以て諸の天華を盛つて、共に西北方に詣いて是の相を推尋す

るに、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し師子座に坐して、

諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の恭敬

圍繞せるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請ずるを見る。

時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し繞ること百千帀して、

即ち天華を以て佛の上に散ず。所散の華須彌山の如し。并

に以て佛の菩提樹に供養す。華の供養已つて、各宮殿を以

て彼の佛に奉上して是の言を作さく、

唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿願わくは納處を垂れたまえ。

爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

聖主天中天 迦陵頻伽の聲をもつて

衆生を哀愍したもう者 我等今敬禮す

世尊は甚だ希有にして 久遠に乃し一たび現じたもう

一百八十劫 空しく過ぎて佛いますことなし

三惡道充滿し 諸天衆減少せり

今佛世に出でて 衆生の爲に眼となり

世間の歸趣する所として 一切を救護し

衆生の父と爲つて 哀愍し饒益したもう者なり

我等宿福の慶あつて

今世尊に値いたてまつることを得たり

爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已つて、各

是の言を作さく、

唯願わくは世尊、一切を哀愍して法輪を轉じ衆生を度脱し

たまえ。

時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を説いて言さく、

大聖法輪を轉じて 諸法の相を顯示し

苦惱の衆生を度して 大歡喜を得せしめたまえ

衆生此の法を聞かば 道を得若しは天に生じ

諸の惡道減少し 忍善の者増益せん

爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したもう。又

諸の比丘、南方五百萬億の國土の諸の大梵王、各自ら

宮殿の光明照耀して昔より未だ有らざる所なるを見て、  
歡喜踊躍し希有の心を生じて、即ち各相詣つて共に此の  
事を議す。何の因縁を以て、我等が宮殿此の光曜ある。而も  
彼の衆の中に一りの大梵天王あり、名を妙法という。諸の  
梵衆の爲に偈を説いて言わく、

我等が諸の宮殿 光明甚だ威曜せり

此れ因縁なきにあらじ 是の相宜しく之を求むべし

百千劫を過ぐれども 未だ會て是の相を見ず

大徳の天の生ぜるとやせん

佛の世間に出でたまえるとやせん

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣械を

以て諸の天華を盛つて、共に北方に詣いて是の相を推尋する

に、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し師子座に坐して、

諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の恭敬

圍繞せるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請ずるを見る。

時に諸の梵天王頭面に佛を禮し繞ること百千帀して、即

ち天華を以て佛の上に散ず。所散の華須彌山の如し。并に

以て佛の菩提樹に供養す。華の供養已つて、各宮殿を以て

彼の佛に奉上して、是の言を作さく、

唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿願わくは納處を

垂れたまえ。

爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同じう

して、偈を以て頌して曰さく、

世尊は甚だ見たてまつり難し

諸の煩惱を破したまえる者なり

百三十劫を過ぎて 今乃ち一たび見たてまつることを得

諸の飢渴の衆生に 法雨を以て充滿したもう



昔より未だ曾て觀ざる所の 無量の智慧者なり

優曇波羅の如くにして 今日乃ち值遇したてまつる

我等が 諸の宮殿 光を蒙るが故に嚴飾せり

世尊大慈悲をもつて 唯願わくは納受を垂れたまえ

爾の時に 諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已つて、各

是の言を作さく、

唯願わくは世尊、法輪を轉じて、一切世間の 諸天・魔・梵

・沙門・婆羅門をして皆安穩なることを獲、而も度脱するこ

とを得せしめたまえと。

時に 諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を以て頌して

曰さく、

唯願わくは天人尊 無上の法輪を轉じ

大法の鼓を撃ち 大法の螺を吹き

普く大法の雨を雨らして 無量の衆生を度したまえ

我等 咸く歸請したてまつる

當に深遠の音を演べたもうべし

爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したもう。

西南方乃至下方も亦復是の如し。爾の時に上方五百萬億の

國土の 諸の大梵王、皆悉く自ら所止の宮殿の光明威曜し

て、昔より未だあらざる所なるを觀て、歡喜踊躍し希有の

心を生じて、即ち各相詣つて共に此の事を議す。何の

因縁を以て、我等が宮殿斯の光明ある。而も彼の衆の中に一

りの大梵天王あり。名を尸棄という。諸の梵衆の爲に偈を説

いて言わく、

今何の因縁を以て 我等が 諸の宮殿

威徳の光明 曜き 嚴飾せること未曾有なる

是の如きの妙相は 昔より未だ聞き見ざる所なり

大徳の天の生ぜるとやせん

佛の世間に出でたまえるとやせん

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣械を以て諸の天華を盛つて、共に下方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し師子座に坐して、諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の恭敬圍繞せるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請ずるを見る。

時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し繞ること百千而して、即ち天華を以て佛の上に散ず。所散の華須彌山の如し。并に以て佛の菩提樹に供養す。華の供養已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して、是の言を作さく、

唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿願わくは納處を垂れたまえ。

時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

善哉諸佛 救世の聖尊を見たてまつるに

能く三界の獄より 諸の衆生を勉出したもう

普智天人尊 群萌類を愍哀し

能く甘露の門を開いて 廣く一切を度したもう

昔の無量劫に於て 空しく過ぎて佛いますことなし

世尊未だ出でたまわざりし時は 十方常に闇暝にして

三惡道増長し 阿修羅亦盛んなり

諸天衆轉た滅じ 死して多く惡道に墮つ

佛に従いたてまつりて法を聞かずして

常に不善の事を行じ

色力及び智慧 斯れ等皆減少す

罪業の因縁の故に 樂及び樂の想を失い

邪見じやくけんの法ほうに住じゆうして 善ぜんの儀則ぎそくを識しらず

佛ほとけの所化しよけを蒙こうむらずして 常つねに惡道あくどうに墮おつ

佛ほとけは世間せけんの眼まなこと爲なつて 久遠くおんに時ときに乃いまし出いでたまえり

諸もろもろの衆生しゆじようを哀愍あいみんしたもう 故ゆえに世間せけんに現げんじ

超ちよう出して正覺しやうがくを成じようじたまえり 我等われらは甚なほだ欣慶こんきやうす

及および餘よの一切さいの衆しゆも 喜みんで未嘗みそう有うなりと歎たんず

我等われらが諸もろもろの宮殿くうでん 光ひかりを蒙こうむるが故ゆえに嚴飾ごんじきせり

今いま以もつて世尊せそんに奉たてまつる 唯ただ哀あわれみを垂たれて納受のうじゆしたまえ

願ねがわくは此この功徳くどくを以もつて 普あまねく一切さいに及およし

我等われらと衆生しゆじようと 皆みな共に佛道ぶつどうを成じようぜん

爾その時ときに五百萬億まんおくの諸もろもろの梵天ぼんてん王おう、偈げをもつて佛ほとけを讚ほめ已おわ

つて、各おの佛ほとけに白もうして言もうさく、

唯ただ願ねがわくは世尊せそん、法輪ほうりんを轉てんじたまえ。安穩あんおんならしむる所多ところおほ

く、度脫どだつしたもう所多ところおほからん。

時ときに諸もろもろの梵天ぼんてん王おう、而しかも偈げを説といて言もうさく、

世尊せそん法輪ほうりんを轉てんじ 甘露かんろの法鼓ほつこを擊うつて

苦惱くのうの衆生しゆじようを度どし 涅槃ねはんの道どうを開示かいししたまえ

唯ただ願ねがわくは我わが請しやうを受けて 大微妙だいみまうの音みこえを以もつて

哀愍あいみんして 無量劫むりやうこつに習ならえる法ほうを敷演ふえんしたまえ

爾その時ときに大通智勝だいつうちしやう如來にょらい、十方ほうの諸もろもろの梵天ぼんてん王おう及び十六王子おうじの

請しやうを受けて、即時そくじに三たび十二行じふにぎやうの法輪ほうりんを轉てんじたもう。若もし

は沙門しゃもん・婆羅門ばらもん、若もしは天てん・魔ま・梵ぼん、及び餘よの世間せけんの轉てんずる

こと能あたわざる所ところなり。謂いわく是れ苦く・是れ苦くの集しゆう・是れ苦くの

滅めつ・是れ苦滅くめつの道どうなり。及び廣ひろく十二因緣いんねんの法ほうを説ときたも

う。無明むみやうは行ぎやうに緣えんたり、行ぎやうは識しきに緣えんたり、識しきは名色みやうしきに緣えんた

り、名色みやうしきは六入にゆうに緣えんたり、六入にゆうは觸そくに緣えんたり、觸そくは受じゆに緣えん

たり、受じゆは愛あいに緣えんたり、愛あいは取しゆに緣えんたり、取しゆは有うに緣えんたり、

有は生に縁たり、生は老死・憂悲・苦惱に縁たり、無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す、識滅すれば則ち名色滅す、名色滅すれば則ち六入滅す、六入滅すれば則ち觸滅す、觸滅すれば則ち受滅す、受滅すれば則ち愛滅す、愛滅すれば則ち取滅す、取滅すれば則ち有滅す、有滅すれば則ち生滅す、生滅すれば則ち老死・憂悲・苦惱滅す。佛、天・人・大衆の中に於て、是の法を説きたまいし時、六百萬億那由他の人、一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て心解脱を得、皆深妙の禪定・三明・六通を得、八解脱を具しぬ。第二・第三・第四の説法の時も、千萬億恒河沙那由他の衆生、亦一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て心解脱を得。是れより已後、諸の聲聞衆無量無邊にして稱數すべからず。

爾の時に十六王子、皆童子を以て出家して沙彌と爲りぬ。諸根通利にして智慧明了なり。已に曾て百千萬億の諸佛を供養し、淨く梵行を修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。俱に佛に白して言さく、

世尊、是の諸の無量千萬億の大徳の聲聞は、皆已に成就しぬ。世尊、亦當に我等が爲に阿耨多羅三藐三菩提の法を説きたもうべし。我等聞き已つて皆共に修學せん。世尊、我等如來の知見を志願す。深心の所念は佛自ら證知したまわん。

爾の時に轉輪聖王の所將の衆中八萬億の人、十六王子の出家を見て亦出家を求む。王即ち聽許しき。爾の時に彼の佛、沙彌の請を受けて、二萬劫を過ぎ已つて、乃ち四衆の中に於て是の大乗經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名くるを説きたもう。是の經を説き已つて、十六の沙彌、

阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、皆共に受持し諷誦・通利し

き。是の經を説きたまいし時、十六の菩薩沙彌皆悉く信受す。聲聞衆の中にも亦信解するあり。其餘の衆生の千萬億種なるは皆疑惑を生じき。佛是の經を説きたもうこと、八千劫に於て未だ曾て休廢したまわず。此の經を説き已つて、即ち靜室に入つて禪定に住したもうこと八萬四千劫。

是の時に十六の菩薩沙彌、佛の室に入つて寂然として禪定したもうを知つて、各法座に昇つて亦八萬四千劫に於て、四部の衆の爲に廣く妙法華經を説き分別す。一一に皆六百萬億那由他恒河沙等の衆生を度し、示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。大通智勝佛、八萬四千劫を過ぎ已つて、三昧より起つて法座に往詣し、安詳として坐して、普く大衆に告げたまわく、

是の十六の菩薩沙彌は甚だこれ希有なり。諸根通利にして智慧明了なり。已に曾て無量千萬億數の諸佛を供養し、諸佛の所に於て常に梵行を修し、佛智を受持し、衆生に開示して其の中に入らしむ。汝等皆當に數數親近して之を供養すべし。所以は何ん、若し聲聞・辟支佛及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の所説の經法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし。

佛諸の比丘に告げたまわく、

是の十六の菩薩は常に樂つて是の妙法蓮華經を説く。一一の菩薩の所化の六百萬億那由他恒河沙等の衆生は、世々に生まるる所菩薩と俱にして、其れに従ひ法を聞いて悉く皆信解せり。此の因縁を以て四萬億の諸佛世尊に値いたてまつることを得、今に盡きず。諸の比丘、我今汝に語る、彼の佛の弟子の十六の沙彌は、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於て現在に法を説きたもう。無量百千萬億の

菩薩・聲聞あつて以て眷屬とせり。其の二りの沙彌は東方に  
 して作佛す。一を阿闍と名け歡喜國にいます。二を須彌頂と  
 名く。東南方に二佛、一を師子音と名け、二を師子相と名  
 く。南方に二佛、一を虛空住と名け、二を常滅と名く。  
 西南方に二佛、一を帝相と名け、二を梵相と名く。西方に二  
 佛、一を阿彌陀と名け、二を度一切世間苦惱と名く。西北方  
 に二佛、一を多摩羅跋梅檀香神通と名け、二を須彌相と名  
 く。北方に二佛、一を雲自在と名け、二を雲自在王と名く。  
 東北方の佛を壞一切世間怖畏と名く。第十六は我釋迦牟尼佛  
 なり。娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。

諸の比丘、我等沙彌たりし時、各各に無量百千萬億恒河沙  
 等の衆生を教化せり。我に従つて法を聞きしは阿耨多羅三  
 藐三菩提を爲しにき。此の諸の衆生今に聲聞地に住せる  
 者あり。我常に阿耨多羅三藐三菩提に教化す。是の諸人等、  
 是の法を以て漸く佛道に入るべし。所以は何ん、如來の智慧  
 は信じ難く解し難ければなり。爾の時の所化の無量恒河沙等  
 の衆生は、汝等諸の比丘及び我が滅度の後の未來世の中の  
 聲聞の弟子是れなり。我が滅度の後、復弟子あつて是の經を  
 聞かず、菩薩の所行を知らず覺らず、自ら所得の功德に於  
 て、滅度の想を生じて當に涅槃に入るべし。我餘國に於て  
 作佛して更に異名あらん。是の人滅度の想を生じて涅槃に入  
 ると雖も、而も彼の土に於て佛の智慧を求め是の經を聞く  
 ことを得ん。唯佛乘を以て滅度を得、更に餘乘なし。諸の  
 如來の方便説法をば除く。

諸の比丘、若し如來自ら涅槃時到り衆又清淨に、信解  
 堅固にして空法を了達し、深く禪定に入れりと知りぬれば、  
 便ち諸の菩薩及び聲聞衆を集めて、爲に是の經を説く。

世間に二乗として滅度を得るあることなし。唯一佛乘をもつて滅度を得るのみ。比丘當に知るべし、如來の方便は深く衆生の性に入れり。其の小法を志樂し深く五欲に著するを知つて、是れ等の爲の故に涅槃を説く。是の人若し聞かば則便信受す。

譬えば五百由旬の險難惡道の曠かに絶えて人なき怖畏の處あらん。若し多くの衆あつて、此の道を過ぎて珍寶の處に至らんと欲せんに、一りの導師あり。聰慧明達にして、善く險道の通塞の相を知れり。衆人を將導して此の難を過ぎんと欲す。所將の人衆、中路に懈退して、導師に白して言さく、我等疲極して復怖畏す、復進むこと能わず。前路猶お遠し、今退き還らんと欲すと。

導師諸の方便多くして、是の念を作さく、此れ等慙むべし。云何ぞ大珍寶を捨てて退き還らんと欲する。

是の念を作し已つて、方便力を以て、險道の中に於て三百由旬を過ぎ、一城を化作して、衆人に告げて言わく、

汝等怖るることなかれ、退き還ること得ることなかれ。今此の大城、中に於て止つて意の所作に隨うべし。若し是の城に入りなば快く安穩なることを得ん。若し能く前んで寶所に至らば亦去ることを得べし。

是の時に疲極の衆、心大に歡喜して未曾有なりと歎ず。我等今者斯の惡道を免れて、快く安穩なることを得つ。是に衆人前んで化城に入つて、已度の想を生じ安穩の想を生ず。

爾の時に導師、此の人衆の既に止息することを得て復疲倦なきを知つて、即ち化城を滅して、衆人に語つて、汝等

去來、寶所は近きに在り。向の大城は我が化作する所なり、止息せんが爲のみと言わんが如し。諸の比丘、如來も亦復是の如し。今汝等が爲に大導師と作つて、諸の生死・煩惱の惡道、險難長遠にして去るべく度すべきを知れり。若し衆生但一佛乘を聞かば、則ち佛を見んと欲せず、親近せんと欲せじ。便ち是の念を作さん、佛道は長遠なり。久しく勤苦を受けて乃し成ずることを得べしと。佛是の心の怯弱下劣なるを知しめして、方便力を以て、中道に於て止息せんが爲の故に、二涅槃を説く。若し衆生二地に住すれば、如來爾の時に即ち爲に説く、

汝等は所作未だ辯ぜず。汝が所住の地は佛慧に近し。當に觀察し等量すべし。所得の涅槃は眞實に非ず。但是れ如來方便の力をもつて、一佛乘に於て分別して三と説く。彼の導師の止息せんが爲の故に大城を化作し、既に息み已んぬと知つて、之に告げて、寶所は近きに在り、此の城は實に非ず、我が化作ならくのみと言わんが如し。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

大通智勝佛 十劫道場に坐したまえども

佛法現前せず 佛道を成ずることを得たまわす

諸天神・龍王 阿修羅衆等

常に天華を雨らして 以て彼の佛に供養す

諸天天鼓を撃ち 并に衆の伎樂を作す

香風萎める華を吹いて 更に新しき好き者を雨らす

十小劫を過ぎ已つて

乃ち佛道を成ずることを得たまえり

諸天及び世人 心に皆踊躍を懷く



彼の佛の十六の子 皆其の眷屬

千萬億の圍繞せると 俱に佛所に行き至つて

頭面に佛足を禮して 轉法輪を請ず

聖師子法雨をもつて 我及び一切に充てたまえ

世尊は甚だ値いたてまつり難し 久遠に時に一たび現じ

群生を覺悟せんが爲に 一切を震動したもう

東方の諸の世界 五百萬億國の

梵の宮殿光曜して 昔より未だ曾て有らざる所なり

諸梵此の相を見て 尋ねて佛所に來至し

華を散じて以て供養し 并に宮殿を奉上し

佛に轉法輪を請じ 偈を以て讚歎す

佛時未だ至らずと知しめして

請を受けて默然として坐したまえり

三方及び四維 上下亦復爾なり

華を散じ宮殿を奉り 佛に轉法輪を請ず

世尊は甚だ値いたてまつり難し 願わくは大慈悲を以て

廣く甘露の門を開き 無上の法輪を轉じたまえ

無量慧の世尊 彼の衆人の請を受けて

爲に種種の法 四諦・十二縁を宣べたもう

無明より老死に至るまで 皆生縁に従つて有り

是の如き衆の過患 汝等應當に知るべし

是の法を宣暢したもう時 六百萬億姪

諸苦の際を盡くすことを得て 皆阿羅漢と成る

第二の説法の時 千萬恒沙の衆

諸法に於て受けずして 亦阿羅漢を得

是れより後の得道 其の數量あることなし

萬億劫に算數すとも 其の邊を得ること能わじ

時に十六王子 出家し沙彌と作つて

皆共に彼の佛に 大乘の法を演説したまえと請ず

我等及び營從 皆當に佛道を成ずべし

願わくは世尊の如く 慧眼第一淨なることを得ん

佛童子の心 宿世の所行を知しめして

無量の因縁 種種の諸の譬諭を以て

六波羅蜜 及び諸の神通の事を説き

眞實の法 菩薩所行の道を分別して

是の法華經の 恒河沙の如き偈を説きたまいき

彼の佛經を説きたまい已つて 靜室にして禪定に入り

一心にして一處に坐したもうこと 八萬四千劫

是の諸の沙彌等

佛の禪より未だ出でたまわざるを知つて

無量億の衆の爲に 佛の無上慧を説く

各各に法座に坐して 是の大乘經を説き

佛宴寂の後に於て 宣揚して法化を助く

一一の沙彌等の 度する所の諸の衆生

六百萬億 恒河沙等の衆あり

彼の佛の滅度の後 是の諸の聞法の者

在在諸佛の土に 常に師と俱に生ず

是の十六の沙彌 具足して佛道を行じて

今現に十方に在つて

各 正覺を成ずることを得たまえり

爾の時の聞法の者 各 諸佛の所にあり

其の聲聞に住することあるは

漸く教うるに佛道を以てす

我十六の數にあつて 會て亦汝が爲に説きき

是の故に方便を以て 汝を引いて佛慧に趣かしむ  
 是の本因縁を以て 今法華經を説いて  
 汝をして佛道に入らしむ 愼んで驚懼を懷くこと勿れ  
 譬えば險惡道の 迴かに絶えて毒獸多く  
 又復水艸なく 人の怖畏する所の處あらん  
 無數千萬の衆 此の險道を過ぎんと欲す  
 其の路甚だ曠遠にして 五百由旬を經  
 時に一りの導師あり 強識にして智慧あり  
 明了にして心決定せり 險きにあつて衆難を濟う  
 衆人皆疲倦して 導師に白して言さく  
 我等今頓乏せり 此れより退き還らんと欲す  
 導師是の念を作さく 此の輩甚だ慙むべし  
 如何ぞ退き還つて 大珍寶を失わんと欲する  
 尋いで時に方便を思わく 當に神通力を設くべしと  
 大城郭を化作して 諸の舍宅を莊嚴す  
 周市して園林 渠流及び浴池  
 重門高樓閣あつて 男女皆充滿せり  
 即ち是の化を作し已つて  
 衆を慰めて言わく懼るること勿れ  
 汝等此の城に入りなば 各所樂に隨うべし  
 諸人既に城に入つて 心皆大に歡喜し  
 皆安穩の想を生じて  
 自ら已に度することを得つと謂えり  
 導師息み已んぬと知つて 衆を集めて告げて  
 汝等當に前進むべし 此れは是れ化城ならくのみ  
 我汝が疲極して 中路に退き還らんと欲するを見る  
 故に方便力を以て 權に此の城を化作せり

汝今勤め精進して

當に共に寶所に至るべしと言わんが如く

我も亦復是の如し これ一切の導師なり

諸の道を求むる者 中路にして懈廢し

生死・煩惱の 諸の險道を度すること能わざるを見る

故に方便力を以て 息めんが爲に涅槃を説いて

汝等は苦滅し 所作皆已に辯ぜりと言う

既に涅槃に到り 皆阿羅漢を得たりと知つて

爾して乃し大衆を集めて 爲に眞實の法を説く

諸佛は方便力をもつて 分別して三乗と説きたもう

唯一佛乗のみあり 息處の故に二を説く

今汝が爲に實を説く 汝が所得は滅に非ず

佛の一切智の爲に 當に大精進を發すべし

汝一切智 十力等の佛法を證し

三十二相を具しなば 乃ち是れ眞實の滅ならん

諸佛の導師は 息めんが爲に涅槃を説きたもう

既に是れ息み已んぬと知れば 佛慧に引入したもう

妙法蓮華經卷第三